



株式会社エコノス 代表取締役社長  
長谷川 勝也 さん

**dec**  
Hokkaido Development Engineering Center

2012.2.1 vol.317

(社)北海道開発技術センター・ニュースレター

## dec monthly

デックマンスリー

カーボンオフセットは、市場メカニズムを活用して効率的に国や世界のCO<sub>2</sub>排出量を削減する仕組みです。ぜひチャレンジし「環境貢献」を企業の付加価値に――

一現在、貴社エコノスとdecのコンソーシアムで道経部（環境・エネルギー室）からの受託事業をすすめています。その一環で昨年12月、「建設業のための国内クレジット・カーボンオフセットセミナー」を開催し、講師のお1人として提案や事例紹介をされました。このテーマにとり組むようになった経緯はどのようにことですか？

当社は6年前にリユース業の2社が合併して設立した会社です。社名は「エコロジーとエコノミーの共生」という理念を、北海道つまりノースから発信していくとの思いを込めエコノスとしました。この理念に向けてリユース以外にどんなビジネスが展開できるか、模索していたとき2008年の洞爺湖サミット開催が発表され、地球環境をテーマに京都議定書やCO<sub>2</sub>排出権取引が議論の中心になると報道されました。海外ではすでに排出権ビジネスが一般化し、カーボンオフセット・プロバイダが活躍していました。一方、日本ではまだ2社ほど。この状況に気持ちが動き、一から勉強を始めて、排出権の購入やそれを活用したカーボンオフセット、そこから生まれる新たな環境貢献、販売促進などを自ら試みながら、道内企業の皆様に紹介するようになりました。徐々にとり組む企業が出始め、マスコミも「京都議定書の達成に貢献できる」等、とり上げてくれることが多くなりました。

――カーボンオフセット、あるいは国内クレジット、いずれもわかりにくいというイメージがあります。

基本的にはCO<sub>2</sub>削減のために市場メカニズムを活用し、環境貢献するという概念です。市場メカニズムとは、たとえば毎日食べるご飯を自分でつくっていない、お米を作った人や小売りの人に対価を払い食べている。自分でお米を作って食べるしたら大変な時間と費用が必要だからです。つまり役割分担――カーボンオフセットもこの原理です。CO<sub>2</sub>を日本など先進国で1キロ削減しようとすると相当な努力やお金が必要ですが、たとえばアフリカで百円を投じる

と100キロ削減するプロジェクトも可能です。このように効率的に、国や世界全体のCO<sub>2</sub>総排出量を削減する仕組みです。

ただ、当初日本のカーボンオフセットは「国連が認証した排出権を購入し海外でオフセットする」と限られ、とり組みづらい側面もありました。しかし間もなく環境省による国内排出権制度ができ、森林間伐や省エネ機器導入等さまざまな手法が認められることとなり、私は北海道にとってビジネスチャンスだと、一段と思いを強くしたのです。排出権という眠っていた財産を売り外貨を稼げる、北海道はカーボンオフセットの先進地になれる、と。環境省が公募したモデル事業に10件ほど提案し、2件採用され実施しました。

その後経済産業省による排出権（国内クレジット）も制度化され、道内ではいま排出権を創出するプロジェクトが数多くすんでいます。全国的にも北海道は多く、実は業界では当社の認知度は高いのです。「カーボンオフセット協会」を全国的に組織し、質の高いカーボンオフセットの普及促進のため活動していますが、昨年からは私が会長を務め力を入れています。北海道はカーボンオフセットによる環境貢献、地域活性化に大きな可能性がある、このことを皆様にも認識いただきたいと思います。

――スイスのカーボンオフセット・プロバイダであるマイクライメイト社と業務提携されましたね？

カーボンオフセットは本来自主的な活動として始まったものですが、日本では京都議定書をきっかけに政府主導で始まったという特質があります。そのためカーボンオフセット・マーケットが育っていない現実があり、我々としてはしっかりと知識やノウハウに基づきカーボンオフセット・マーケットの拡大に寄与することも使命の一つであると思います。そこで発祥の地ヨーロッパの企業と業務提携し、世界に通ずるカ

ボンオフセットの普及およびマーケット拡大につなげたいと考えたのです。昨年11月、本格的な展開をめざしてマイクライメイトと当社の共同出資で「マイクライメイトジャパン」を子会社化しました。プロジェクトマネジメントとして事業領域が一気に広がり、省エネ機器導入やエネルギーの見える化、CO<sub>2</sub>換算、その企業にとってのメリットや付加価値の企画・コンサル等々、これまで蓄えてきたさまざまなノウハウが活用され始め、近く始まる十勝広尾町のスマートコミュニティの可能性調査などへの参加も決まっています。いずれも北海道の可能性を開くためのノウハウ蓄積を意識してとり組みたいと思っています。

――dec会員をはじめとする北海道の建設業の皆様へ、メッセージを。

環境に配慮したとり組みはいまや必然であり、新たな公共事業です。CO<sub>2</sub>をキーワードに、まず自社のCO<sub>2</sub>総量を公表し「見える化」して、とり組みやすいカーボンオフセットにチャレンジしてください。環境貢献という自社の付加価値につながります。また現在、震災からの復興に向けて再生可能エネルギーを重点としたプロジェクトがすすんでおり、たとえばメガソーラーが建設されるとき建設業の役割は大きいです。さらにそれらプロジェクトの多くはCO<sub>2</sub>排出権創出、地域への資金還元という総合的な仕組みの中で実施されますから、そこに北海道の企業が率先して入り込み、他地域と差別化していくものと希っておられます。

### Profile

はせがわ・かつや

1966年北見市生まれ。地元企業在職中は（社）北見青年会議所副理事長・監事等を務め、まちづくり運動や地域活性化運動に取り組む。その後札幌市を拠点に道内唯一のカーボンオフセット・プロバイダとして（株）エコノスを立ち上げ、代表取締役社長を兼任。2011年よりマイクライメイトジャパン（株）代表取締役社長を兼任。全国組織のカーボンオフセット協会設立にも携わり、現在同会長。ほか、カーボンオフセットに関する種々の委員会委員等。

# 揺れ動く世界を見据えて。 雪寒冷地から発信しつづける 技術・文化・環境貢献

## 第27回寒地技術シンポジウム

〈主催／社団法人北海道開発技術センター〉

2011年11月30日・12月1日・2日、札幌コンベンションセンターにおいて標記シンポジウムが開催されました。気候変動やエネルギー問題、大規模災害等、大きく揺れ動く世界や日本の新たな課題を背景に、今回も計103編の論文が発表され技術情報が交換されました。概要をまとめてご報告いたします。



開会挨拶 本多dec理事長  
「積雪寒冷地の新たな指針を構築すること、世界の寒地技術の進歩発展に大きく寄与することをめざし、本シンポジウムを重ねています」

### 寒地技術賞表彰式

2011年度は次の3編が受賞。佐伯浩選考委員長に代わり、金田dec調査研究部長より選考理由の説明が行われました。



表彰状授与



#### 〈学術部門〉

##### 『MPS法を用いた雪崩シミュレーションモデルの構築』

加藤 宏隆 氏(北海道大学大学院 北方圏環境政策工学専攻) ほか

発生した雪崩の勢いについて現地観測データが少なく評価手法が確立されていない中、新たな数値計算の適用により可能性が示され、今後に期待されます。

#### 〈産業部門〉

##### 『寒冷地の新幹線における散水消雪方式の適用限界把握』

野口 守 氏(鉄道建設・運輸施設整備支援機構) ほか

新幹線の北海道延伸に伴い、現在北海道では採用されていない散水消雪方式について継続的研究と把握を行い、雪対策に寄与することが期待されます。

#### 〈地域振興部門〉

##### 『未利用熱を利用した直接接触熱交換式空気融雪システムの開発』

大内 克行 氏(株式会社ホクスイ設計コンサル) ほか

新たな融雪システムの開発により未利用エネルギー利用の実用化が予想され、積雪寒冷地の振興と今後の展開に期待されます。

### 特別講演

## 雪や寒さを逆手にとる地域再生の展望

沼野 夏生 氏(東北工業大学 工学部建築学科 教授)

積雪寒冷地の山間部では過疎高齢化などにより、住みづづけることが困難な地域も出始めています。そうした状況下、「地域社会の再生に雪や寒さは有効な媒体」と力のこもるメッセージが送られました。

#### 〈要旨〉

## 震災現場を歩き災害文化にふれる

東日本大震災の現場を歩き、集落の再編

をテーマとして共同研究しています。陸前高田市では大小の漁港や漁村が例外なく壊滅しましたが、実際に歩いてみると高さによって被災状況にはっきりとした差を見ることができ、自然の冷酷さを見せつけられました。正直言って気が滅入る仕事です。しかし、現地漁村の人々は打ちひしがれているのでなく、結束力をもって立ち上がっている。元の暮らしをとり戻そうという意志がつよく感じられ逆に勇気づけられました。調査の焦点は高台への

集落移転です。あるまちは明治と昭和に経験した十数メートルの津波に対し、山を削って階段状に新しいまちを造成し移転していました。ところが時間がたつにつれて市街地が広がっていき、低い場所にも建物が建てられ、今回被災してしまった。同じまちの高い場所の百数十戸の街並みは何事もなかったように存在し、対照的な状況となっていました。津波常襲地帯には災害文化が育っています。「ここより下に家を建てるな」と書かれた碑や、津波への注意を怠るなという戒めの伝承、教育が長年にわたりつづけられ、また被災地の中での助け合いも行われています。ただ時間間隔が大きいと被災に対する風化が起こるもので

もある。今回は従来のレベルを超えていたこともあり、被害が拡大したといえると思います。

## 変化してきた雪国の災害文化

一方、雪国の災害文化は、地震や津波とは対照的です。地震や津波などが突然的・即時的であるのに対し、雪は連続的・継続的。換言すると激震性と累進性ともいえ、それぞれ闘いの中心は時間間隔が大きいために「忘れてしまうこととの闘い」、毎年やってくる雪は「気を抜けないこととの闘い」。しかし共通することは地域社会が闘いの担い手となることです。

雪国の災害文化は、時代によって大きく変わっています。近代以前は共同による支え合いの多彩な工夫がありました。たとえば「雪道路順番表」。積雪があると地域の

## 講演 観光業から見た「寒地」と「技術」の価値

山岸 奈津子 氏(株式会社星野リゾートマム総支配人室、広報マネージャー)

星野リゾート・マムにおける冬の新たな挑戦とは? 山岸氏は今後のコンテンツ開発のキーワードは「寒地」と「技術」であると述べ、北海道観光の展望を語りました。(※本紙前号で要旨を紹介しました。)



かせないという考え方が浸透しつつあり、さらにこれを「雪国の地域力形成の契機に」というとり組みが行なわれるようになっています。地域で運営する流雪溝、雪かきボランティア、スノーバスターズなど、多様な主体や他地域とのネットワークで活動が展開され、さらに第三世代ともいえる「雪かき道場」という除雪のスキル認定や地域通貨を活用する仕組みづくりなどがすすんでいます。

できました。中・高校生は高齢者とのふれあいをきっかけに地域のことを考え、理解し、将来は地域を担う人材に育つことが期待されています。青森の赤坂スノーバスターズは、地域との関わりが少なかった団塊世代の居場所となり、機械除雪や屋根雪下ろし、作業後の飲み会と元気いっぱい定年後を豊かにしている事例。岐阜県高山市の「のくとい館」は遊休の教員住宅に高齢者が冬の間集まって暮らし、入居者中心に寒干ダイコンを生産・販売し、村の産業にしようとしている。集まると知恵が出るという事例です。私自身がとり組んでいるのは、「除雪支援マップ」の作成・活用の提案です。現在新庄市の密集住宅地で試作中ですが、一人暮らしの高齢者などがどこに住みどんな状態で暮らしているか、人とのつながりをもっているかいないか、除雪する体力があるか等々ある程度個人情報にも踏み込んで細部にわたる状況を把握し、支援していくためのマップです。これを基にワークショップを行い今後の地域づくりにつなげたいと考えています。

また各地で雪灯りも盛んです。先述の西和賀町では学生やボランティアがいっしょに道路沿いの雪壁に穴を開けて明かりを入れ、温泉へと誘導している。「雪がもっとあるのに」と、大切な資源であることの気づきとなっています。山形県月山の「雪はたごの灯り」は、昔のはたごの街並みを雪で原寸大で再現し、灯りを飾って期間中旅館は満員。一大豪雪地だからできることです。北海道下川町のアイスキャンドルフェスティバルも素晴らしい成功例です。寒さ、雪という資源を活かし誇りを持ってとり組むことで何かが生まれます。

すばらしい写真を紹介しましょう。山形の「歴史たてもの研究会」の人が所持している「十日町の冬」という写真連作の絵葉書。たとえば、二階建ての屋根よりも高く雪の壁を垂直に立て、その技を披露している人。あるいは背負子で雪を背負い川へ捨てに行く途中、雪山と雪山をつなぐ橋の上でポーズをとる人々、など。まるで雪の多さを楽しみ自慢しているかのようです。さらに、それを写真に撮り絵葉書にした人がいた—そういう心意気が大切だと思うのです。(文責/dec)



各家が順番に雪踏みをし道路を確保する共同作業が行われた。また春の風物詩のような「雪割り」。地域全体で阿吽の呼吸で行われていた共同作業です。お寺の屋根の雪下ろしや、残雪期に木を共同伐採しソリで搬出する「春木山」という共同作業などさまざまな工夫があり、「深雪地域ほど村の連帯がつよい」と結論した当時の研究者もいました。

ところが近代化の時代に入り、共同性は失われ個人で雪に対処する社会になります。技術の発達や都市化の進展、公私の二分化、伝統軽視の風潮といった社会になり、隣同士の雪ゲンカも起こるようになった。車社会では豪雪で都市機能が麻痺し、一方で過疎高齢化、人口減少がすすみ、雪国に住みつけられない状況に向かい始めたのです。そして今、雪国再生への模索が始まりました。住みづけるにはコミュニティの復権、互助・共助の複合的な地域の支え合いが欠

## 雪という資源を活かすことでの何かが生まれる

このように、かつてのように共同体として生きしかなかつた時代から、選択肢が増え個人が雪と対峙していく克雪の時代、次第に雪や寒さをアイデンティティとした自覚的な協働の地域社会へと変遷してきたのです。元の姿に戻るようにも見えますが、近代以前はほかに選びようがなく身近にたまたまいた同質的な人同士が共同体を支えたもの。しかし現在は広域の多様な人々が自覚的に協働や支え合いを選び取っています。具体的な事例の一つスノーバスターズは、高齢化で雪かきの人手が足りないことを逆手に、中・高校生を巻き込み岩手県西和賀町の旧沢内村で発祥した除雪ボランティアの仕組みです。地域内外の人々が積極的に関わり適切な雪かきが行われ、今ではこれをモデルにしたグループが県内にたくさん



次回開催地よりメッセージ  
青森県県土整備部道路課丸井孝幸氏  
「青森県弘前市で開催します。情報交流の  
ほか歴史ある街並みをお楽しみ下さい」

## 技術展示

計11（17展示）の企業・団体等により技術展示が行われました。

(株)アクア・グレース

(独)土木研究所 寒地土木研究所

寒地交通チーム、雪氷チーム、

寒地道路保全チーム、寒地機械技術チーム、

寒地技術推進室道央支所

(株)GTスパイラル

(株)セネコム

(株)ノースプラン

(株)ヴァイサラ

(株)北海光電子

北海道大学 GCOE環境教育研究交流推進室

三菱電機特機システム(株)

南工業(株)

山田技研(株)

## 分科会

〈冬と防雪〉〈冬と交通〉〈冬と生活〉〈寒地とエネルギー〉〈寒地と海・河川〉〈寒地と構造物〉〈冬と気象〉をテーマに13分科会において計103編の論文発表（内、ポスター発表16編）が行われました。気候変動やエネルギー問題、大規模災害等、近年の特徴が反映され、各分科会とも真剣な議論が交わされました。

〈冬と防雪IV〉で発表された『北海道の山間部における雪密度と剪断強度の関係とその活用方法』（横山博之氏／（独）寒地土木研究所、北見工業大学ほか）は、近年の北海道山間部の国道で、短時間に多量の降雪による乾雪雪崩が多発していることをうけ、乾雪雪崩時の通行止め解除時の判断

に役立てる目的で、雪密度と積雪の剪断強度の観測データを蓄積し解析したもの。短時間で定量的に積雪の安定度を求める手法として提案が行われました。〈寒地と海・河川〉における『定期航路としての北極海航路NSRの可能性に関する考察』（大塚夏彦氏／北日本港湾コンサルタントほか）は、北極海のユーラシア大陸側、欧洲側大西洋、東アジア側太平洋の間を結ぶ航路NSRの国際的な海上輸送利用に向け、夏期海水勢力減退傾向など環境・社会・経済の変化を背景に、定期航路によるコンテナ輸送について考察。苫小牧港をNSRハブ港として取り上げロッテルダムと苫小牧港間7,070海里的運行シナリオなどが紹介されました。〈寒地とエネルギーI〉における『ローコストペレットストップの開発』（南光次氏／南工業株式会社ほか）は、東日本大震災時にも電気を使わず薪も燃やせる機種のペレットストップが注目されたことなどから、この普及に向けて15万円以下を目標に機種開発にとり組んだもの。さまざまな工夫によりローコストを可能にした新機種「原始林」が紹介されました。〈冬と生活〉における『防災ゲーム「クロスロード」を活用した冬期防災力向上の実践』（諸橋和行氏／社団法人中越防災安全推進機構ほか）は、人口減少・高齢化の著しい中山間地域における冬期地域防災力の強化に向けた調査研究。災害対応を自らの問題としてとらえ、さまざまな意見や価値観を参加者同士で共有することを目的としたゲーム形式の手法が提案されました。



説明、質問、実演等が熱く飛び交いました



# 建設業のための国内クレジット・カーボンオフセットセミナー

地球温暖化防止に向け各方面でとり組みがすすむ中、建設業界が国内クレジットやカーボンオフセットで効果を挙げていくには—。去る12月5日、札幌市内において標記セミナーが開催され業界関係者等約100名が学びました。decも主要な役割を担い参画しています。概要をまとめ紹介いたします。〈主催／北海道経済部産業振興局環境・エネルギー室、建設業における国内クレジット等団体推奨モデル事業受託コンソーシアム〉

本セミナーはdecと株式会社エコノスで構成するコンソーシアムが、北海道からの受託によりすすめている事業の一環。エコノス社はカーボンオフセット・プロバイダとして事業展開している先進的な企業の一つである。今回のセミナーは地球温暖化防止あるいは限りある化石燃料消費への配慮といった大きな背景のもと、国内クレジットやカーボンオフセットを道内の建設業分野においてどうとり込むことが得策か、その考え方や手法等を学び行動に移すことを目的に開催された。開会に先立ち、金田dec調査研究部長は「環境にとり組む一つの布石となること同時に、建設業の競争力強化につながるよう期待します」と挨拶。プログラムは2つの基調講演と事例紹介およびパネルディスカッションで構成された。

基調講演①「社会資本LCAの導入による社会資本整備に伴うCO<sub>2</sub>排出量削減の可能性」(曾根真理氏／国土交通省国土技術総合研究所 環境研究部道路環境研究室 室長)では、まず認識の重要性が説かれた。LCA(ライフ・サイクル・アセスメント)とは、「ある製品について原材料の採取、製造、使用、処分に至るまでの“生涯”を通して環境側面および潜在的影響を評価する」もの。建設部門についてのCO<sub>2</sub>排出量をみると、建設・土木を合わせて日本の総排出量の約14パーセントを占める。対策が必要であり「建設業関連企業の割合が高い北海道が担う役割は大きい」。たとえば道路舗装部門でいうと現場で使う機器そのものから排出されるCO<sub>2</sub>以外に、セメント工場からの排出、事業用電力からの排出、アスファルト原料輸送からの排出等が大きく、こうした排出傾向の特徴は橋梁や河川等々各部門ごとにみられ、それらを把握することで効果的な対策に結びつけようと研究がすすめられていることだ。社会資本へのLCAを試行した結果では、「リサイクルやコスト縮減、施工性向上等の技術の中にCO<sub>2</sub>削減効果があるものが見つかった」という。詳細な計算事例等は、国総研のホームページで発表されている。

基調講演②「ライフサイクルアセスメントとカーボンフットプリントの概要」(伊坪徳宏 氏／東京都市大学 環境情報学部 准教授)は、建設業に絞った内容ではなく「LCAとカーボンフットプリントの特徴、最近の動向、世界的な方向」の解説が行われた。カーボンフットプリント(CFP)とは、さまざまな製品やサービスの

原材料調達・生産・運搬・使用・廃棄という一連のライフサイクルにおいて、各過程で排出されるCO<sub>2</sub>を合算し、製品やサービスに表示してCO<sub>2</sub>排出量を「見える化」した仕組み。表示マークとして日本では「ハカリとそれに載せた皿」がデザインされ皿上にCO<sub>2</sub>排出量が書き込まれる。ライフサイクルに基づくという点はLCAと同じだが相違点はCFPの場合、他社製品との比較を前提に表示。消費者にとってはよりわかりやすい。しかし公平性や透明性等の課題は多く、今後に向けて国によるデータベース化や国際規格化作業がすすめられているといふ。一方LCAのアプローチは、厳しい規約の下、地球温暖化のみならず生物多様性や水、化学物質などさまざまな環境影響を網羅することが大きな特徴である。

「カーボンオフセットと国内クレジット制度」(長谷川勝也氏／株式会社エコノス 代表取締役社長)では、制度の活用事例の報告および提案等が行われた。同社は道内唯一のカーボンオフセット・プロバイダで2008年から事業開始し、10年にはスイスのプロバイダ・マイクライメイトと業務提携、11年にマイクライメイトジャパンを設立し国際的にも展開している。カーボンオフセットは「市場メカニズムを活用することで、自社で省エネ等に投資するよりも効果的に、国内および世界全体のCO<sub>2</sub>総排出量低減に貢献できる仕組み」と同氏は説明。「この基本概念のもと国や企業のCO<sub>2</sub>削減目標達成に向けて積極的にカーボンオフセットにとり組んでいきたいものです」と呼びかけた。活用できるクレジットには「CER」「J-VER」「国内クレジット」「東京都クレジット」などがある。

同氏は「建設事業者におけるクレジット活用の可能性には、2つの方向性がある」とする。一つは、国内クレジットあるいはJ-VERやCERで削減しても「減らしきれないCO<sub>2</sub>量をオフセットして環境貢献し企業をPRする」。もう一つは、「国内クレジットやJ-VER制度のルールに従い、CO<sub>2</sub>削減量をクレジット化する」。

建設事業者におけるオフセットのとり組み事例の一つは、植村建設(株)が行った赤平市の国道38号線舗装工事のCO<sub>2</sub>排出オフセットだ。環境家計簿を現場に導入、出入り業者の協力も得てデータを収集しCO<sub>2</sub>総排出量45,308.7キログラムと算定。これをシニックバイウェイ支援センターが管理する「シニックの森・植樹型カーボンオフセット」により6パーセント相当(京都議定書にもとづく)の2,718.5キログラム分の植樹を行ったものだ。同センターより証明書を受け取



り、赤平市や取引先等に「6パーセントのCO<sub>2</sub>削減建設現場」であることを提示し自社の付加価値を高めた。一方、建設事業者自らがクレジットを創出するとり組みも、環境省、経済産業省を中心とする国内クレジット制度にのっとりさまざまな手法が可能だ。例として、工事現場での省エネによる創出一たとえば通常の建設機械をハイブリッドの建設機械に換えることでCO<sub>2</sub>排出量が減った分をクレジット化など。またエンジニアに提供した省エネ設備による創出一たとえば旧型照明からLED照明に更新しCO<sub>2</sub>排出量が減った分をクレジット化など。さらに、社有林の保全でクレジットを生み出す方法もある。道内ではすでに(株)南組が社有林の適切な保全にとり組み、より多くのCO<sub>2</sub>を吸収させた分をクレジット化し売買等を実施している。

同氏は国による動きについても説明した。平成24年度概算要求〈温室効果ガス排出削減量連動型中小企業グリーン投資促進事業費〉は21億円。「低炭素型投資を行う中小企業に対し、当該設備の導入によるCO<sub>2</sub>排出削減量見合いの助成金を支給する」等の内容となっている。強力な後押しであり「我々にとってのチャンス。省エネ導入・低炭素化の動きは今後ますます活発化するでしょう。ぜひ組み始める」。

「パネルディスカッション」は、コーディネーター高野伸栄氏(北海道大学大学院 准教授)、パネラーは曾根氏、伊坪氏、長谷川氏、そして今村聖祐氏(北清企業株式会社 取締役営業部長)の5名により行われた。初めに今村氏より同社における先進的なり組みが紹介された。業種は廃棄物処分業で札幌の事業系、一般家庭系ゴミの25パーセントを収集。埋め立て処分のほか、埋め立て地を活用したパークゴルフ場や農場等に幅広く組んでおり、これらに対し「環境大臣賞」等の受賞実績がある。CO<sub>2</sub>削減のとり組みは、食品会社等から出る廃食用油をバイオディーゼル燃料としてリサイクルし、所有車両の一部に利用。年間400トン近いCO<sub>2</sub>削減となり、これが排出権取引のとり組みへのスタートとなった。その後J-VER制度に登録。各契約企業に同社で削減できたCO<sub>2</sub>排出量と同等の排出権クレジットを提供したところ共感を呼び、受注が飛躍的に伸びたということだ。

ディスカッションでは各氏から建設業界へ、力づよくエールが送られた。高野氏は「公共事業による環境影響に市民は敏感です。信頼を得るために新たな取り組みを」と呼びかけた。(文責/dec)

# 今を語り、未来につなぐ夢を交換

## シニックバイウェイ北海道 全道フォーラム2011

シニックバイウェイ北海道はスタートして7年が経過し、12の指定ルートにおいて個性ある活動が展開され充実をみています。さらなる地域活性化への期待を背に、去る12月3日、札幌コンベンションセンターにおいて標記フォーラムが開催され、活動報告と次への展望などが交換されました。(主催/シニックバイウェイ北海道推進協議会)



主催者挨拶  
高松泰推進協議会副会長(北海道開発局長)「地域の皆様の日ごろの活動は、質の高い地域観光に寄与する意義深いもの。感謝を申し上げます」

### ■新ルートの紹介

2011年度、新しく2つのルートが指定され代表者から決意の言葉が述べられました。

#### 十勝シニックバイウェイ 南十勝夢街道

「道東道が全通したこの機会を活かし十勝の3ルートが連携して、大人たち子どもたちの夢を育む地域空間づくり、観光地づくりにとり組みます」

#### 札幌シニックバイウェイ 藻岩山麓・定山渓ルート

初めての都市型シニックバイウェイとして視線が集まるのを感じながら、自然が隣り合う都市空間を活かし切る活動をめざします」

ている、当ルートの象徴的な事業で受賞を光榮に思います。人をつなぐシニックとしてこれからも新しいプロジェクトに挑戦したい」と喜びと抱負を語りました。また、石田東生審査委員より「『ヒラメ底建て網…』は地域に共有の輪が広がっており意義が深い。今後は他の特産品にもつなげ成長するプロジェクトに」と、エールが送られました。

### ■12 ルートからの活動 PR

ルートストーリーや活動のコンセプト、課題、今後の展開をテーマに12ルートから活動PRが行われました。ポイントを抜粋してご紹介します。

評価も高まっています。さらなる地域力アップのため連携をつよめて活動します。

#### 十勝シニックバイウェイ 十勝平野・山麓ルート

4,600平方メートルという広大さを活かし、活動の一つは清水町から上士幌町まで130キロメートルの「馬の道プロジェクト」。多くの来訪者に楽しんでいただけるよう、馬道の案内標識や道路沿いのシニクカフェなどの整備をすすめています。



#### 釧路湿原・阿寒・摩周シニックバイウェイ

長く活動をつづけるため、“楽しみながら仲良く”をモットーに活動しています。新たな挑戦として、長年の「カフェ連携」におけるエゾシカ肉を使ったメニュー開発、障がいをもつ人や高齢の方々を迎える体制づくりなどをすすめています。



### ■ベスト・シニックバイウェイズ・プロジェクト2010 各賞の発表

2010年度のとり組みから次のプロジェクトがベスト・シニックバイウェイズに選ばれました。

最優秀賞に輝いた萌える天北オロロンルートの佐藤太紀副代表は「『ヒラメ底建て網…』は地元漁協、役場、学校等をつなぎ実施し

#### 大雪・富良野ルート

冬の景観を楽しみながら新たな地域活性化をと、とり組んできたウインターランは7回目を数えます。ネクスコ東日本や道の駅など官民連携の地域づくりに育ち、



### ベスト・シニックバイウェイズ・プロジェクト2010

\*最優秀賞 「ヒラメ底建網オーナー in 遠別」  
萌える天北オロロンルート

\*優秀賞 「ドライブフリーマップの作成」  
釧路湿原・阿寒・摩周シニックバイウェイ

\*審査員特別賞 「エキノコックス駆除活動」の広域展開  
支笏洞爺ニセコルート

\*同 地域の情報発信・PR「情報拠点」  
大雪・富良野ルート

\*奨励賞 「シニックバイウェイ・スタンプラリー in 南区2010」  
札幌シニックバイウェイ 落岩山麓定山渓ルート



総評(石田氏)

#### どうなん・追分シニックバイウェイルート(候補)

“ひと”と“みち”がつなぐ北の大地の地域力再生へのチャレンジ”をテーマに、道南全域でとり組んでいます。各町にある歴史や文化が香る伝統的なお祭り、イベント、新鮮な食材を活かし“どうなん体験観光”を推進中です。



## 十勝シニックバイウェイ

### 南十勝夢街道

山、川、海、田園、さらには航空宇宙実験基地など多くの可能性を秘め、夢のあるルート。子どもたちの視点からも魅力づくりをしたいと「学校シニックバイウェイ」にとり組み、6年生児童にアンケート調査をしました。ご期待を。



## 東オホーツクシニックバイウェイ

代表者の別名は“シニックマン1号”。流水・田園・山岳3つのステージの広域エリアを精力的に発信しています。オホーツク地域を馬で走り回るイベント、大雪原を独り占めするツアーなどにとり組み、商品化もすすんでいます。



## 札幌シニックバイウェイ

### 藻岩山麓・定山渓ルート

集客施設、体験メニュー、芸術施設等が豊富な、初めての都会のルート。活動をとおして施設が連携できるというメリットを活かし“稼げるシステム”をつくりていきます。都会であり自然もありビジネスチャンスは多いと思う。トライしていきます。



## 支笏洞爺ニセコルート

シニックナイト、バスツアーなど、訪れた人といっしょに楽しむ交流の場づくりを展開。できることを無理なくつづけることを大切に、魅力ある地域づくりをめざしています。また、失敗をおそれない人間づくりもミッションと考えています。



## 十勝シニックバイウェイ

### トカブチ雄大空間

経済活動をメインに運営。道東道が全通した今年「癒とりフェスタ」ではたくさんの団体と連携して予想を大きく上回る集客を、札幌のオータムフェストでは「十

勝グルメストリート」が大好評と、結果を出すことができました。今後アジアにも発信していきます。

## 萌える天北オロロンルート

トヨタがスポンサーのテレビ番組で、道をきっかけとする暮らしに根ざした活動としてとり上げられ、全国に紹介されました。これからも先人の労苦、今の暮らしと子どもたちをキーワードに、世代間のつながりを大事に活動していきます。



## 宗谷シニックバイウェイ

生物多様性を保護する「礼文島リボンプロジェクト」ではアツモリソウのバッジを千円で販売し、益金を環境保護活動に充てています。ウインドファームやメガソーラーの先進地として、電気自動車を通じたエコ観光ルートの仕掛けを研究中です。



## 函館・大沼・噴火湾ルート

「人と人をつなぐ道」をテーマに、活動をとおして親睦を深めていきます。「シニックの森づくり」「シニックdeナイト」「はこだて花かいどう」など自慢の活動は多い。今後は、どうなん・追分ルートさんとも交流を持ち、広域ですすめます。



意見や感想を付箋に書いて貼り付ける新手法、反応は上々。

## ■推進協議会などの助言

12ルートからの熱のこもる活動PRをうけ、関係者の方々から感想・助言等が寄せられました。「出身地域のことでも知らないことが多いと気づいた。地元の高校生などの視点も巻き込むと斬新な活動につながります」(一般社団法人北海道商工会議所連合会観光担当部長 平野徳夫氏)。

「観光対象として魅力的な活動です。シニックで連携し、知名度の低いところを国内外に発信してください」(北海道運輸局企画観光部長 井上健二氏)「道を通じて仲間がつながり訪れた人ともつながって地域の大いな力になっています。私の出身地平取町がルートに入っていないがぜひ入ってほしい」(北海道経済部観光局参事 神田広光氏)「稼げるシステムづくりという考え方大事な視点。各ルートのとり組みそれぞれに期待できます。これから全国的に知名度が上がっていくでしょう」(一般社団法人日本自動車連盟会員課長 永田典孝氏)

## ■意見交換（ポスターセッション）

「ルートなんでもベスト5」をポスター等で展示、ルート相互の情報交換や来場者との意見交換が行われました。

## ■講演と情報共有

泉一也氏（イルビジョン株式会社 代表取締役社長）による講演「地域と組織の活性化のためにリーダーが行うべきこと」、およびルート審査委員から締めくくりと次に向けてのコメントが述べされました。（＊これらの内容は次号以降でご紹介する予定です。）

とり組みへの感想・感動・助言を述べた推進協議会メンバーの方々



平野氏



井上氏



神田氏



永田氏



「若い人を増やすためにも学校シニックは有効な視点ですね」（臼井純子氏）



「次のステップに向けて、儲けるのではなく“稼ぐ”ことを考えましょう」（高野伸栄氏）

# 第11回「野生生物と交通」研究発表会のご案内

生態学的な知識や情報と交通技術等、異分野間をつなぐ意見交換をおこし、自然環境保全と交通の利便性や安全性のバランス、地域経済への影響等を考える研究発表会です。詳しくは、ホームページ (<http://www.wildlife-traffic.jp/>) をご覧下さい。  
※ホームページが新しくなりました！



第10回「野生生物と交通」より

## 【開催概要】

- ◆開催日時／2012年2月24日(金) 10:00～
- ◆会 場／札幌コンベンションセンター  
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)
- ◆主 催／(社)北海道開発技術センター
- ◆共 催／(社)エゾシカ協会・(財)北海道環境財団・  
一般社団法人 シニックバイウェイ支援センター
- ◆協 力／エコ・ネットワーク

## スケジュール(しめきり)

1. 論文発表申し込み終了しました。
2. 論文集予約 2012年2月17日(金)／開催当日販売(予価2,500円)
3. 聴講 2012年2月15日(水)／無料
4. 懇親会 2012年2月15日(水)／4,000円(予定)

## お申し込み／お問い合わせ

(社)北海道開発技術センター内「野生生物と交通」研究発表会係  
(担当 鹿野たか嶺・中村志織)  
〒060-0051 札幌市中央区南1条東2丁目11  
TEL: 011-271-3022 FAX: 011-271-5366  
E-mail: [wildlife@decnet.or.jp](mailto:wildlife@decnet.or.jp)

# 今冬も「転ばないコツ」を発信中です！



札幌市内では、つるつる路面での転倒事故が例年よりも多数発生しています。皆様お住まいの地域ではいかがでしょうか。まだまだ、厳しい寒さがつづきそうな北海道ですが、ウインターライフ推進協議会では、つるつる路面特派員による札幌市内の「つるつる路面情報」を今年も提供中です。あわせて「つるつる路面予報」メールサービスも2/29まで配信しております。(登録必要) 外出時の参考にぜひご覧ください。また、「特派員」も随時募集しています。皆様からの情報をお待ちしております。詳しくはウインターライフ推進協議会のHP (<http://tsurutsuru.jp/>) をご覧ください。



また今年度は、協議会による冬の暮らしに役立つ情報マガジン「雪友（ゆきとも）」を発行しております。冬に関わるお天気情報、雪・氷にまつわる豆知識などが掲載されております。こちらもHPからご覧ください。vol.3は2月中旬に公開予定です。

## 編集後記

今年の寒さは身に染みますね～。「ブロッキング高気圧」、初めて聞いた言葉ですが、この影響で日本列島に寒気が居座り、寒さと大雪をもたらしているとのこと。北海道では空知方面の大雪で地域の方が大変な目にあっていますが、関東地域でも「つるつる路面」が発生して、歩行者の転倒事故や車のスリップ事故が多発しました。ちょっと前までは考えられないことです。ウインターライフ推進協議会へも関東のテレビ局や新聞社から「つるつる路面での転倒事故を防ぐには」と、問い合わせが多数寄せられました。全国放送のテレビでご覧になった方もいるかと思います。協議会のとり組みがお役に立て良かったと思うとともに、これからも情報発信に力を入れていきたいと思っております。(H・K)

「プリムラオブコニカ。サクラソウ科。中国原産のプリムラの1種で、和名はトキワザクラ…」(植物画による毎年カレンダー 北海道花暦から)。机の脇で毎日目を楽しませてくれる日めくり毎年カレンダーの<2月29日>がこの花の絵です。ということは、この1枚は4年間出番がなかったのです。今年は閏年。地球が太陽を一周するのにかかる日数が365.0○…日なので、調整のため4年に1回設けられた閏年です。改めて2月29日のカレンダーの花をしっかり眺めたいと思います。ところで「毎年カレンダー」((株)リージャスト発行/dec会員)はこの「北海道花暦」につづいて「大好き北海道」「北海道の野鳥」とシリーズ化され、好評のようです。拍手!! (E・O)